

## 論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 教育学 ）	氏名	本 渡 葵
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
論 文 題 目 “SELF-AUTHORSHIP”が育つ国語教育の構想			
論文審査担当者 主 査 教授 難波 博孝 審査委員 教授 朝倉 淳 審査委員 教授 山元 隆春			
〔論文審査の要旨〕 本論文の研究の目的は以下の通りである。 ①PISA 型読解力の「熟考」の力を起点とし、DeSeCo のキー・コンピテンシーの「反省性：“Reflectivity”」について理論的背景を明らかにする（第1章） ②DeSeCo のキー・コンピテンシーの「反省性：“Reflectivity”」の理論的背景にある“SELF-AUTHORSHIP”をふまえた国語教育の具体化を構想するてがかりとして、「不適切な養育」を受けた学習者への教育の一実態を事例としてとりあげ検討する（第2章、第3章） ③「不適切な養育」を受けた学習者への教育の一実態をふまえ、“SELF-AUTHORSHIP”が育つ国語教育の構想に向けたアクション・リサーチをおこなう（第4章、第5章） ④理論の検討とアクション・リサーチをふまえ“SELF-AUTHORSHIP”が育つ国語教育を構想する（第6章、終章）  本研究の概要は以下のとおりである。 第1章では、日本におけるPISA 型読解力の「熟考」概念について、先行研究の検討から、「熟考」概念の理論的検討が蓄積されていない点と、「熟考」の力の同定が十分でない点が明らかになった。そこで、PISA の背景にあるDeSeCo のキー・コンピテンシーのうち、「熟考：“reflect on”」との関連性から、「反省性：“Reflectivity”」に焦点をあてた検討をおこなった。その結果、キー・コンピテンシーの理論的背景の議論を記した未邦訳の著作物があることと、「反省性：“Reflectivity”」の概念は、Kegan の理論を援用していることが明らかにした。 第2章では、Kegan の理論をふまえ、教育の具体化に向けて考究した。Kegan は生涯発達心理学と成人学習を研究領域とする研究者である。DeSeCo が述べる「(現代生活に) 求められる精神的複雑さ」のレベルは、Kegan の構造発達理論において、“SELF-AUTHORSHIP”をもちえるレベルである。本研究では、「精神的複雑さにおける自己編集能力」と措定した。以上の検討から、“SELF-AUTHORSHIP”が育つ国語教育の構想のために次の3点を指標の柱とした。1つ目は、Kegan による“ <i>In school</i> ”の項目である。2つ目はBaxter による“SELF-AUTHORSHIP”の獲得に向けた大学教育のモデルのLPM(Learning Partnerships Model:以下LPM)と、“SELF-AUTHORSHIP”の3要素である。3つ目が、ローエンサル(2008)による教育である。これら3つを集約したモデルを作成し、HAM(Hondo Aggregation Model:以下HAM)と命名した。今後のバージョンアップを見据え、			

HAMver. 1.0 とした。

第3章では、「不適切な養育」を受けた学習者像をふまえ、教育実践を検討する際の手がかりとして、情緒障害児短期治療施設併設校 A 校でおこなった参与観察について述べた。A 校のカリキュラムや参与観察から得たデータを、HAMver. 1.0 によって分析した。

第4章では、A 校で実践したアクション・リサーチについて論じた。アクション・リサーチ I では、1名の学習者を対象とし、A 校のカリキュラムにない「音読」活動に着目しつつ、絵本の読みあいや、シャドーイング、テキスト・シャドーイング、しりとり、交換おはなしづくりなどを組み合わせた実践をおこなった。

第5章では、アクション・リサーチ II について論じた。アクション・リサーチ II では、複数の学習者を対象とし、社会科の内容を扱いながら、国語科の目標も達成できるような合科的な授業を実践した。

第6章では、第1章から第5章をふまえ、HAMver. 1.2 および HAMPver. 1.1、さらに DeSeCo のキー・コンピテンシーを用いたカリキュラム案を提示した。

本研究の成果は以下にまとめることができる。

① DeSeCo のキー・コンピテンシー「反省性 (“Reflectivity”）」の理論的背景を明らかにすることができたことである。具体的には、DeSeCo が想定する “Reflectivity” の段階が Kegan の構造発達理論における “SELF-AUTHORSHIP” をもちえる段階であることを明らかにし、また、本研究において、“SELF-AUTHORSHIP” は、「自己編集の力：自分の人生を自分でつむぎだす感覚 (力)」と措定したこと。

② “SELF-AUTHORSHIP” を教育の具体化につなげるために、Kegan、Baxter、ローエンサル (2008) の論考を集約し、HAMver. 1.0 を提示した。これは、個人の生涯発達を見据えた、“SELF-AUTHORSHIP” が育つ国語教育を構想するための教育の1つの指標となるものである。これをもとに、情緒障害児短期治療施設併設校における参与観察、およびカリキュラムの分析を、行い、HAMver. 1.0 をバージョンアップし、HAMver. 1.1 を提示したこと。

③ 第4章、第5章のアクション・リサーチから、HAMver. 1.1、HAMPver. 1.0 をバージョンアップし、HAMver. 1.2、HAMPver. 1.1 を提示したこと。

④ HAMver. 1.2 や HAMPver. 1.1 に加え、DeSeCo のキー・コンピテンシーをモデルとしたカリキュラム設計の枠組み、KCP を提示し、A 校に焦点をあてたカリキュラムの提案をおこなうことができたこと。さらに、特別支援教育における「個別の指導計画」と、HAMver. 1.2、HAMPver. 1.1、KCP の融合の可能性を提示したこと。

これらの研究成果は、不適切な養育を受けた養育を受けた学習者のみならず、個別の支援が必要な多くの学習者、さらには、全ての学習者が、「自己編集の力：自分の人生を自分でつむぎだす感覚 (力)」を持つための必要な国語カリキュラム作成の礎となる重要な研究であることを認めることができる。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士 (教育学) の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成 28年 2月 12日